

リンバロストの台所から

青 嶋 由美子

1 はじめに

人は生きていくうえで、「食べる」という行為と関わりが深い。食べるものについて、無関心であることは可能であっても、食べる行為そのものと無関係であることは難しい。そのため、文化の違いを考察する際に、その国独自の料理を比較することが多い。しかし、グローバル化が進む現代、一つの国の料理を、単純にその国独自の料理と判断することは困難である。

現代の日本を例にしてみると、伝統的な懐石料理が存在する一方で、家庭料理や郷土料理を重視する流れがある。アメリカ系のファースト・フード、コーヒー・チェーンも全盛であり、また、明治以降西欧を中心に流入してきたカレーやコロッケ、カツ、スパゲッティ、ハンバーグ、ラーメン、チーズフォンデュといった各国の独自の料理も取り込んでいる。エスニック料理と称して、アジア・アフリカ系の料理も存在感をますます増している。異文化交流の見本となっているのが、現在の日本の食だと言える。

四方を海に囲まれた小さな島国である日本でさえ、このような状況であるのだから、多民族国家であり、広大な領土を有するアメリカ合衆国では、実に様々な「食」が味わわれていることは明白である。民族的に

言えば、先住民族であるネイティブ・アメリカン、初期のイギリスからの移民、ペンシルバニア・ダッチと呼ばれたドイツ系移民、南部をその領土としていたフランスからの移民、アイルランド、北欧、19世紀末から増加したイタリア系移民、東欧系移民、ユダヤ系移民、アジア系移民など、まさに「人種のメルティング・ポット」である。実に多くの民族がアメリカのそこかしこで、母国の食文化を広げていたのである。この民族分布にも関係するのだが、アメリカは、地域によっても食の相違が顕著である。プリグリム・ファーザーズを始祖とする東部イギリス（ニューイングランド）系、南部のプランテーション文化を中心とするクレオール（クリオール）系・ソウルフード・ケイジャン系、開拓時代の名残と豊富な果実・野菜をメインとする西部系、大穀物地帯に代表される中西部系などである。食の形態も、時代と共に変化していった。男性が食料を手に入れ女性が家庭で手作りしていた料理も、家庭用冷蔵庫や冷凍庫の普及、食品企業の巨大化、缶詰や加工食品の一般化、さらに女性の社会進出に伴い、加工食品で作る手作りの家庭料理が定着していった。栄養のバランスを考えて、栄養補助食品も手軽に摂取されるようになった。勿論、プリペARED食品も積極的に取り入れられているし、手軽に惣菜を入手出

来るデリカテッセンは重宝されている。コーシャー（ユダヤ教宗教食）・デリ、コリアン・デリといった民族料理に特化したデリも人気が高い。

このようなアメリカの大きな食の流れの中で、「20世紀初めにアメリカ料理の終わりが始まった」と食の歴史家が述べている。また、1920年代、「アメリカの食」はニューイングランド風に画一化されていくことになったとも評されている。¹⁾ アメリカの都市人口が農村人口を上回り、食材を購入する形態に依存するようになったのも、1920年代だと言われている。だとすれば、1909年に出版された、Gene Stratton Porterの *A Girl of the Limberlost* で描かれていた数多くの食事場面は、少女小説の中で、最後の「アメリカ料理」を描写した作品の一つと考えられるのではないか。アメリカの、どこにでも在った筈の、自然豊かな田舎での「アメリカ料理」の一端を知ることが出来るのではないだろうか。本稿では、この作品に描かれた食事に関する場面を考察し、その食事が本編中で果たす役割と「アメリカ料理」の内容とを考察するものである。

2 二つのお弁当

エルノラ・コムストック(Elnora Comstock)が、オナバシャの高等学校へ初めて登校する日、母キャサリン・コムストック(Katherine Comstock)は、一人娘にお弁当を用意した。母がわざわざ買ってきたという“立派な新しい弁当入れ (this nice new pail)”²⁾ に、“最初の日のための特別なもの (especial for the first day)”³⁾ を詰めた

というお弁当であった。しかし、16歳のエルノラは、このブリキの弁当用缶を持ち歩くことには耐えられなかった。『赤毛のアン (*Anne of the Green Gables*)』の世界では一般的であったこのバケツ形の弁当入れも、1893年生まれと設定されているエルノラには、もはや時代遅れの品でしかなかったのである。高等学校に授業料が必要であるとか、教科書は有償であるといった事実を知らない、或る意味で「箱入り娘」状態であった田舎の少女エルノラにとってさえ、母が準備したものは旧式の弁当入れに映っていた。この日、母が作ってくれたサンドウィッチをナプキンで包み直してボール箱にしまうと、エルノラは弁当入れを大きな古い「そばかす」の箱に隠した。そして、サンドウィッチは、オナバシャの町外れに在る深い排水溝にかかる橋の土台と路面の間に隠された。昼休みにこの橋に戻ったエルノラは、ボール箱の中身が空になっていることを知る。だから、エルノラは、このお弁当を実際に口にすることはなかった。作品中には、この初めてのお弁当がどのようなものであったかの描写は、これだけである。この素っ気無くさえ感じられる描写は、キャサリンのエルノラへの気持ちを象徴的に表しているのではないだろうか。必要なものは用意をしてあるのだが、相手がそれをどのように受け取るかについては、全く斟酌されていない。親として、最低限の義務を果たしてはいるのだが、そこには深い愛情が伴っていない。これが、キャサリンが娘と対するときの姿勢である。その結果として、母のお弁当は、エル

1) 本間千枝子・有賀夏紀『アメリカ (世界の食文化12)』(東京：農文協、2004)。p.182.

2) Gene Stratton Porter, *A Girl of the Limberlost* (1909; rpt. Wheaton, Illinois, Tyndale House Publishers, Inc., 1991), p.10.

3) Ibid., p.10. 引用文の訳は全て筆者による。

ノラの口には届かないのである。

この作品中には、もう一つの「初めての
お弁当」が存在する。エルノラが高等学校
初日に味わった苦渋を知る隣人シントン夫
妻（Wesley and Margaret Sinton）が用意し
てくれたお弁当である。エルノラが高校生
活三日目に手にしたものだ。こちらの描写
は、詳細にわたっている。

まず、お弁当箱の形態は、このように述
べられている。

Wesley opened the package and laid a
brown leather lunch box on the table.
“Might be a couple of books, or drawing
tools or most anything that’s neat and
genteel. You see, it opens this way.”

It did open, and inside was a space for
sandwiches, a little porcelain box for cold
meat or fried chicken, another for salad, a
glass with a lid which screwed on, held by
a ring in a corner, for custard or jelly, a
flask for tea or milk, a beautiful little
knife, fork, and spoon fastened in holders,
and a place for a napkin.⁴⁾

ウェスリーは包みを開け、テーブル
の上に茶色の皮製のランチ・ボックス
を置いた。「二、三冊の本か、絵の道具
か、小奇麗で上品なものみたいじゃな
いか。ほら、こうやって開けるんだよ。」

実際に蓋が開くと、中にはサンドウ
イッチを入れる場所、冷肉やフライ
ド・チキンを入れるための小さな磁器
の箱、もう一つの箱はサラダ用、隅に
ついている環で留めるようになっている
螺子式の蓋のついたコップはカスタ

ードやゼリーを入れるためのもの、紅
茶や牛乳用の携帯壺、ホルダーには、
小さいが立派なナイフ、フォーク、ス
プーンが納まっており、ナプキン用の
スペースまであった。

これは、ウェスリーが、自宅で、マーガ
レットにランチ・ボックスを見せた場面で
ある。そして、この描写は、もう一度ほぼ
同じような内容で繰り返される。こちらは、
ウェスリーとマーガレットが少し早いクリ
スマス・プレゼントとして、ランチ・ボッ
クスをエルノラに見せる場面である。

He handed Elnora the leather lunch box,
with her name carved across the strap in
artistic lettering....

Elnora slipped the strap and turned back
the lid.

This disclosed the knife, fork, napkin,
and spoon, the milk flask, and the interior
packed with dainty sandwiches wrapped
in tissue paper, and the little compartments
for meat, salad, and the custard cup.⁵⁾

彼（＝ウェスリー）は、エルノラの
名前が風雅な文字で彫りこまれた革紐
のかかっているランチ・ボックスを、
彼女に渡した。…中略…

エルノラは、革紐を外し、蓋を裏返
した。

中には、ナイフ、フォーク、ナプキ
ン、スプーン、牛乳の入った携帯壺、
薄紙に包まれた美味しそうなサンドウ
イッチ、肉、サラダの入った小さな仕
切り部分、カスタードの入ったカップ

4) Ibid., pp.31-32.

5) Ibid., p.74.

が入っていた。

キャサリンが用意したブリキの弁当入れとは、何と言う違いであろうか。母に疎まれる少女へと向けられた隣人からの揺ぎ無い愛情は、様々な形で作品中に示されている。このようなお弁当の描写も、その例外ではない。キャサリンが頑なになっている理由を知る者たちとして、シントン夫妻はエルノラのために出来得る限りのことをしてくれる。マーガレットが、エルノラのために整えた「初めてのお弁当」の中身は、次のようなものだった。

“I had milk in that bottle, see! And custard in the cup. There was salad in the little box, fried chicken in the large one, and nut sandwiches in the tray. You can see crumbs of all of them.”⁶⁾

この瓶にはミルクが入っていたわ。そして、このカップにはカスタード。小さな箱にはサラダが、大きな箱にはフライド・チキン、そして、トレイには木の実のサンドウィッチがあったのよ。全部に残りかすがついているのが分かるでしょう。

さらに、付け加えると、カスタードには砂糖漬けのさくらんぼが乗っており、フライド・チキンに使われているのは胸肉であることが、別の箇所にて述べられている。このエルノラの科白の後半部分から推測されるかもしれないが、実は、マーガレットがエルノラのために初めて作ったこのお弁当も、エルノラの口には入らない。しかし、

母が作った「初めてのお弁当」が、浮浪者だか少年だか、正体の分からない者に盗まれたのに対し、マーガレットの作ってくれたお弁当は、エルノラに新しい人間関係をもたらす契機を与えてくれた。

第一の人間関係は、親に構われることなく育った一人の少年とのものである。エルノラは、通学の途中で出会った飢えた男の子に、この弁当を食べさせてやったのであった。

He was a mite of a boy, nothing but skin-covered bones, his burned, freckled face in a mortar of tears and dust, his clothing unspeakably dirty, one great toe in a festering mass from a broken nail, and sores all over the visible portions of the small body.⁷⁾

彼は、骨と皮ばかりの小さな少年だった。日焼けしてそばかすの浮かんだった顔は、涙と埃で塗り固められており、着ているものは、言いようがない程に汚れていた。片方の足の割れた親指の爪には膿んだ塊が出来ており、小さな体には、目につく場所そこかしこに傷があった。

このように描写された少年の名前はビリー (Billy Billings) であった。ビリーは、翌日も、さらに次の日もエルノラの昼食を奪ってしまう。エルノラは、ビリーの境遇を知り、母親に愛されていない自分の不幸の小ささを悟る。お弁当を仲介とした二人のやり取りが繰り返されるのだが、やがて、ビリーの行動は、ウェスリーの耳に入り、

6) Ibid., pp.66-67.

7) Ibid., p.70.

父親が亡くなったこともあって、ビリーはシントン夫妻に引き取られることとなる。この後、ビリーは、隣人でもあるエルノラを崇拜する少年として、作品中に、しばしば登場してくる。ビリーの行動は、しばしば突拍子もない騒動を引き起こすのだが、これが、凍りついてしまったかのようなキャサリンの心にも影響を与える。

エルノラが新しく得た第二の人間関係は、エレン・ブラウンリー (Ellen Brownlee) と彼女の仲間たちとの間に育ったものである。エレン達は、エルノラと直接会話を交わす前に、エルノラの身の上に関する話を耳にしていた。マーガレットは、町の洋品店でエルノラの高校生活を満足のいくものにするための様々な買い物をした。そのとき、マーガレットの買い物の手助けをしたのが、エレン達だった。マーガレットからエルノラの境遇を聞かされたとき、エレン達は、高校生活初日の自分たちの振る舞いを恥じた。身なりで人を判断してしまったためである。そして、マーガレットに、エルノラへ気を配る約束をしていたのだった。彼女の事情を知るエレン達は、エルノラの空っぽになったランチ・ボックスを目にして、エルノラ的心情を理解する。町の少女は、自分の昼食を飢えた少年に渡すよりも、お金を渡せばよかったのと言うが、田舎の少女エルノラは、とても小さい子で本当にお腹を空かせていたからと答えた。町の少女達の考えは、拝金主義とまではいかないが、お金で解決出来ることはお金で解決すれば良いという合理的な姿勢を示唆するものである。エルノラの考え方は、何よりもまず子供のそのときの状態を優先するものである。町の少女達は、四日目に、エルノラの昼食に対して救援の手を差し延

べた。ビリーや、その兄姉であるジミーやベルに、昼食を渡してしまったエルノラの元へ、町の少女達はやって来た。ほとんど空っぽになってしまったランチ・ボックスに、彼女たちなりのプレゼントを詰めてくれた。苺の砂糖漬けが入っていたカップにはバターが、サンドウィッチ用のスペースには、パンの塊から切ったばかりの一切れが収められた。サラダ用の場所には瓶詰めになっていたオリーブが、肉用の盛皿にはハムが入れられる。さらに、ケーキのための容器にはマカロンが、そしてまだ空いているボックスのあちこちにチョコレートやヌガーが詰められた。そして、同じものが、ビリー達にも手渡されたのである。エレン達町の少女は、エルノラを受け入れた。その受け入れの儀式が、この救援隊という形をとったのである。このお弁当を巡る騒動がなかったら、エルノラが新しい友人関係を築くまでに、いま少し時間が必要となっていたことだろう。

母キャサリンがエルノラに持たせた「初めてのお弁当」と、隣人マーガレット・シントンがエルノラに作った「初めてのお弁当」、この二つのお弁当は、それぞれがエルノラとどのように関わりたいのかを象徴するお弁当となったのである。

3 「鳥の小母さん」との昼食

人間の心の機微と食欲とは関係がある。人は、心に気掛かりを抱いているとき、食欲を失う。高校生活二日目、母のささやかなお弁当を手にしつつ、鳥の小母さん (the Bird Woman) の元を尋ねたエルノラが、まさにその状態であった。この日、エルノラは、リンバロストの森で見つけた蛾や蝶、それぞれの蛹などが、金銭と交換されるだ

けの価値を持つものなのかどうか、大きな不安を抱きつつ、鳥の小母さんを訪れていた。高等学校の授業料と教科書代、二つの支払いがエルノラに重く押し掛かっていた。母からの援助は在り得ない。隣人のシントン夫妻にも、経済的な依存はしたくない。エルノラは、自立の精神を重んじるアメリカの少女らしく、この経済的な危機を独力で打開する方策を模索していたのだった。その成否がかかる場面は、昼食を摂りながらのものである。

“What have you collected?” asked the Bird Woman, as she helped Elnora to sandwiches unlike any she ever before had tasted, salad that seemed to be made of many familiar things, but you were only sure of celery and apples, and a cup of hot chocolate that would have delighted any hungry school girl.⁸⁾

「今までにどんなものを収集したの？」鳥の小母さんは、エルノラがこれまでに味わったこともないようなサンドウィッチと、馴染みのあるもので作られているようだが、味が確かに分かるのはセロリと林檍だけのサラダ、そしてどんなに空腹な女子学生でも喜ぶようなホット・チョコレートを一杯、盛り付けてくれながら尋ねた。

しかし、エルノラは、これらを食べられなかった。鳥の小母さんが望んでいるものと、自分が入手出来るものが一致しているのかどうかを確かめたかったからだ。リン

バロストの森の動植物について、二人の間で話は弾み、田舎から町へ初めて出て来た少女が舐める辛酸を語るときには、二人ともが涙を流した。本来であれば、母親からかけられる慰めを、鳥の小母さんから得たことで、エルノラの心はようやく落ち着きを取り戻したのであった。打ち解けあった二人の商談が一区切りついたとき、エルノラは、“remembered how hungry she was, so she ate the food, drank the hot chocolate (自分がどんなに空腹だったかを思い出し、食事をし、ホット・チョコレートを飲んだ)”⁹⁾のである。

この昼食の場面は、エルノラが高等学校生活を送るにあたっての金銭的問題を解決出来るかどうかを描いている。しかし、単純に経済的な問題だけではなく、田舎娘が町に出た際に味わう悔しさや悲しさを「誰か」と分かち合った点で重要なものとなっている。ここに記された食事は、「リンバロストの森」の食事ではない。鳥の小母さんに供されたものではあるが、田舎娘が味わったことのない「都会」の食事である。これを口にしたエルノラは、やがて、自らの力で「都会」で認められる存在になっていけるのだと暗示しているように思われる。

4 母のお弁当、再び

キャサリンは、エルノラのランチ・ボックスを前に考えた。そして、“Wonder how it would do to show Mag Sinton a frill or two. (マグ・シントンの鼻を明かしてやったらどうなるだろう)”¹⁰⁾と呟いた。そうして、

8) Ibid., p.39.

9) Ibid., p.42.

10) Ibid., p.80.

翌日のお弁当の準備を前の晩から始めるのである。ここで描写されているお弁当は、現代の食事情からみると、非常に手の込んだものである。エルノラは、このお弁当を目にして、母は自分のことをやはり愛してくれているのだと感じる。だが、実際は、どうであったのだろうか。キャサリンの複雑に揺れた感情を表す言動から、この時の娘への思いがどのようなものであったかを読み取ることは難しい。この点に関して、ポーターは、直接的には描いてはいない。読者は、「初めての弁当」との差異からそれを読み取らねばならない。

まず、実際のお弁当作りの場面である。

She went to her room, knelt by a big black-walnut chest and hunted through its contents until she found an old-fashioned cook book. She tended the fire as she read and presently was in action. She first sawed an end from a fragrant, juicy, sugar-cured ham and put it to cook. Then she set a couple of eggs boiling, and after long hesitation began creaming butter and sugar in a crock. An hour late the odour of the ham, mingled with some of the richest spices of “happy Araby,” in a combination that could mean nothing save spice cake, crept up to Elnora so strongly that she lifted her head and sniffed amazedly.¹¹⁾

彼女（＝キャサリン）は自室へ入ると、黒い胡桃材で作られた大きな櫃のそばにひざまずき、櫃の中をくまなく探して、古風な料理の本を見つけ出した。本を読みながら火の加減に気を配

り、まもなく行動を起こした。まず最初に、香り良く、汁気のたっぷりとした砂糖漬けのハムの端を鋸で引いて、それを料理した。それから、卵を二個茹でて、長い間躊躇った後、甕の中でバターと砂糖をクリーム状にし始めた。一時間後には、スパイス・ケーキに間違いのない匂いと組み合わせさせた、「ハッピー・アラビイ」の豊かな匂いと交じり合ったハムの香りが、エルノラの元へと強く立ち上っていき、彼女は頭を上げ、驚いて匂いをくんくんとかいだ。

翌朝、キャサリンは無言のまま、このお弁当をエルノラに渡したのだった。エルノラは、学校へ行く前に、草の生い茂った場所へ腰をおろし、このお弁当の中身を確認する。

Half the bread compartment was filled with dainty sandwiches of bread and butter sprinkled with the yolk of egg and the rest with three large slices of the most fragrant spice cake imaginable. The meat dish contained shaved cold ham, of which she knew the quality, the salad was tomatoes and celery, and the cup held preserved pear, clear as amber. There was milk in the bottle, two tissue-wrapped cucumber pickles in the folding drinking-cup, and a fresh napkin in the ring.¹²⁾

パンの容器の半分には卵の黄身を散らしたバターつきパンの風味の良いサンドウィッチが、残りの半分には、想

11) Ibid., p.80.

12) Ibid., p.81.

像も出来ないほど芳しいスパイス・ケーキを大きく切ったものが三切れ入っていた。肉用の皿には、薄くスライスした冷製ハムが詰められていて、この味は彼女も知っていた。サラダはトマトとセロリのもので、カップには琥珀のように透過した砂糖漬けの洋梨が入っていた。塩入りのミルク、折りたたみ式のカップの中には薄紙にくるまれた二切れの胡瓜のピクルス、リングで留められた真新しいナプキンも入っていた。

時間をかけて作られたお弁当である。見た目も美しいし、素材の組み合わせ方も、栄養のバランスを考えてある。甘いものが多いのは、高等学校までの長い距離を徒歩で往復しなければならないエルノラの疲労回復のためであろう。単に隣人に悔しい思いをさせるためだけに作られたお弁当とは、とても考えられない。エルノラはこのお弁当を、母の自分への愛の証として受け止める。

No lunch was ever daintier or more palatable; of that Elnora was perfectly sure. And her mother had prepared it for her!

She glanced around her and then to her old refuge, the sky. "She does love me!" cried the happy girl. "Sure as you're born she loves me; she just hasn't found it out yet!"¹³⁾

これほど風味が良くて美味しそうなお弁当は他にはない。エルノラは、そ

のことを確信した。そしてお母さんがそれを自分のために準備してくれたのだ。

彼女は周りを見回して、それから、昔からの逃げ場である空を見上げた。「お母さんは私のことを愛している」と、幸福な少女は叫んだ。「生まれたときから、愛してくれているんだ。まだ、そのことに気付いていないだけなんだ。」

エルノラに、母の愛情を確信させるようなお弁当は、その翌日にも作られる。

Undoubtedly Mrs.Comstock was showing Margaret Sinton the "frills". The cake was still fresh, and there were four slices. The sandwiches had to be tasted twice before Elnora discovered that beechnuts had been used in a peanut recipe, and they were a great improvement. There were preserved strawberries in the cup, potato salad with mint and cucumber in the dish, and a beautifully browned squab from the stable loft.¹⁴⁾

疑うことなく、コムストック婦人はマーガレット・シントンの鼻を明かした。ケーキはまだ出来立てだし、しかも四切れもあった。エルノラはサンドウィッチを二回も味わってから、ようやく、ピーナッツの代わりにブナの実が使われているのだと分かった。そして、ブナの実の方がずっと美味しかった。カップには砂糖漬けの苺があり、ミントと胡瓜で飾られたポテトサラダ

13) Ibid., p.81.

14) Ibid., p.88.

が皿に収まっており、厩の屋根裏にいた雛鳩が見事にこんがりと焼かれていた。

娘の感謝の言葉に、母は、自分たちが住んでいる土地から取れる食材を使っているだけだと答える。切り詰めた生活を送らねばならない母娘であるが、食べるものだけは不自由はしないから、このようなお弁当を作っているだけだと答えるのである。エルノラが信じたいと望む母の愛情については、やはり、まだこの時点では認められないような母の言葉である。

そして、注目しなければならないのは、ここまで詳細に内容が語られるお弁当であるが、エルノラの口に入ったのは、ごく僅かでしかないという点である。この母のお弁当も、また、あのビリー少年たちに食べられてしまうのである。この後、ビリーが引き取られて、エルノラが自分のお弁当をゆっくりと味わえる状況になってからは、お弁当の描写はされていない。「母の愛情の証」を、エルノラはまだ味わうことが出来なかったのである。

【つづく】

Bibliography

1) Primary Source

Porter, Gene Stratton. *A Girl of the Limberlost*. 1909: rpt. Wheaton, Illinois, Tyndale House Publishers, Inc., 1991.

2) Secondary Sources

本間千枝子・有賀夏紀『アメリカ（世界の食文化12）』東京、農文協、2004.